

会 議 録

会議名 (審議会等名)		相模原市立図書館協議会				
事務局 (担当課)		図書館 電話042 - 754 - 3604 (直通)				
開催日時		令和3年3月18日(木) 18時~19時30分				
開催場所		相模原市立図書館 2階 視聴覚室				
出席者	委員	9人(別紙のとおり)				
	その他	0人				
	事務局	8人(図書館長、相模大野図書館長、橋本図書館長、他5人)				
公開の可否		可	不可	一部不可	傍聴者数	0人
公開不可・一部不可の場合は、その理由						
議 題		(1) 令和元年度図書館事業評価について				
		(2) その他				

議 事 の 要 旨

主な内容は次のとおり。(は委員の発言、 は事務局等の発言)

1 令和元年度図書館事業評価について

令和元年度図書館事業評価について、事務局より説明を行った。

【資料1】令和元年度相模原市図書館事業評価シート(案)

説明の中で「中央図書館機能」という言葉が使われていたが、どのような機能を想定しているのか。

現状では、市立図書館、相模大野図書館、橋本図書館が並列的に位置付けられているが、『第2次相模原市図書館基本計画』(以下、『第2次計画』)において、市立図書館に全体を統括する中央図書館機能を置くことを目指している。具体的には、図書館全体を捉えた企画の推進や、より専門的な機能などを置くことを想定している。

補足として、資料1のp34をご覧いただきたい。内部評価において、中央図書館が確立及び充実を目指す機能として、「企画・統括機能」「専門的機能」「人材育成機能」の3つが挙げられている。図書館では、まずこの3点を中央図書館の核となる機能として位置付けていると理解しているが、それで良いか。

その通り。

組織として、全体を管轄する機能と理解した。

現在、図書館の機能自体が大きく変わってきており、図書館は本を置く場所というような本に特化したまなざしで見ていると、見誤ってしまうところがあるのではないか。

蔵書が増えた、あるいは本への興味を高めるという見方ではなく、知を蓄積し、市民の財産として位置付けていく知の集積所として図書館を考えた時に、評価の中で蔵書を増やすという数値目標を挙げていることに違和感を持った。

単に組織上の中央図書館ということではなく、中央図書館がネットワークの核となって、どのようにネットワークを形成していくのかという理念的なまなざしが必要ではないかと考える。

これからの図書館は、蔵書だけではなく、場の提供や支援体制の仕掛けづくり、また、一つの方向性として地域づくりにどう役に立てるのかという視点も重要と捉えている。『第2次計画』では、施設面の整備も含め、ご指摘のあった図書館ネットワークの形成という観点から、中央図書館の機能を検討してまいりたい。

図書館ネットワークについては、中央図書館の企画・統括機能の中で、その管理・運用を施策として位置付けている。具体的には、公民館図書室などの関係機

関との連携強化や、配送体制の強化など、図書館ネットワークのソフト面での機能充実に取り組んでいくこととしている。

図書館が知の集積所であるという視点からは、レファレンスサービスの機能が非常に重要と考える。市民が抱える地域課題を解決するレファレンスサービスの機能を考えた時に、現代的な地域課題に取り組む市民活動を行っている団体との連携が必須であり、そうした団体に適切なアドバイスができる機関であることを期待したい。そのような社会教育的な役割を果たしていくという意味においても、レファレンスサービスの機能がますます重要になっていくのではないかと思うので、中央図書館の機能としてお考えいただきたい。

数字の上で本が増えた、減ったというのは重要ではないと感じている。出版に関わる立場から言えば、図書館は出版文化を守る要であり、今具体的には思い浮かばないが、図書館にしかできないことがあると考えている。利用の多さなど数値として表れることよりも、出版を文化として守るような役割を果たすことができないかと思っている。

図書館の核となるものとして、数値や利用のように単純に測れないものがあって、そこをもっと打ち出していくことを求めたいということで良いか。

例えば、様々な図書館で子どもへのおはなし会をしてきた経験では、相模原市の図書館が子どもに親しみやすい施設になっているとは感じられない。

出版と子どもをつなぐ大切な施設として、文化的な側面から何か良い方法や、取組ができないかと思う。

話を伺っていて、人々の生活の時間や意識が変わらないと、利用されないのではないかと感じた。図書館の価値を見出し、利用につなげるための努力が必要ではないかと思う。

評価については、各成果指標の数値のプラス、マイナスの妥当性を判断することが難しく、評価にうまくつながらない。例えば数より質であったり、施策の実現性であったりといった、異なる視点から評価を考える必要があるのではないか。

学校現場は変化が大きいと感じている。特に今回のコロナ禍の影響は大きく、以前は朝読書の時間があったが、コロナ禍以降は無くなってしまっている。さらに、GIGAスクール構想では、タブレットPCを一人一台持ち、使いこなせるようにという時代の流れになっており、本や読書から離れるような傾向が続いている。そうした変化の中で、子どもたちは時間に追われているのではないかと感じている。

また、コロナ禍が続き、子どもたちが辛抱しきれなくなっているのは、学校現場で目に見えてきている。

そのような状況で、図書館の利用につなげるのは高い目標だとは感じるが、どのような利用の仕方があるのか、子どもたちに説明する際のイメージがなかなか湧かない。

選択肢の一つとしてきちんと提示されていない限りは、図書館を利用していただけないと思うので、図書館としての役割に加え、様々な活動の場の一つとして選択してもらえそうな環境や機能を充実させておかなければならない。あわせて、コロナ禍のような特殊な環境下においてどのように業務を継続していくのか、並行して考えなければならぬと考える。

公民館図書室では、これまでは長い時間室内で本を読んだり、机で勉強したりという光景が見られたが、現在は机などを制限し、長時間のご利用はご遠慮いただいている。

これまでの話を伺っていると、利用の減少は仕方がないものの、4～5月の状況と比べると、そこまで大きく減少していないのではないかと感じている。不特定多数のイベントができないなどの制約はあるが、制約下においてこそ、できることが何かを考えられれば良いと思う。

自分の周囲では、コロナ禍のこの1年間で、本を読んで過ごすという方が増えたと感じている。感染拡大が少し落ち着いたところで、また本に向かう人が増えるのではないかと感じる。

また、外部評価の中で『広報さがみはら』での周知に言及している意見があり、同感だった。アンケートを見ても、事業の周知という点では『広報さがみはら』や地元誌の『タウンニュース』の影響が非常に大きいと感じており、良い意見だと感じた。

皆様のご意見を聞いていて、コロナ禍で人々の生活スタイルが変わってきている中で、知識を高めたり、そのために読書をしたりといった時間の使い方の変化を想像し、その変化に対し図書館ができることを探っていくことが、考える入口になるのではないかと感じた。

コロナ禍終息後の世界は、それ以前に戻るのではなく変わる、あるいは変わらなければ、子どもたちの未来は無いと考える。

出版文化に意義を感じてはいるが、本に特化した図書館というのは考え直した方がよい。発信する側も受ける側も模索が必要だが、憩いの場所で、楽しく本が

読めれば良いということであれば、民間のサービスに任せても良いのではないか。そうではなく、市民にとっての知の集積所という観点で考えると、外部評価では主に障害者サービスの視点で意見を述べたが、まだ取組が不足していると感じた。

子どもたちの関心が本から離れていくとするならば、どこに関心が向いているのか、未来の知のあり方にアプローチをしていかななくてはならないと思う。

コロナ禍が終わったら元に戻る図書館ではなく、コロナ禍を経たからこそ展開できる図書館のあり方や専門性を求めることが、図書館の存在意義につながるのではないか。

これから目指すべき社会の変化に寄り添って、あるいはそれに先んじて、図書館が活動していかなければならないことが一つと、それと同時に図書館ができること、伝統的に培ってきたことを維持・発展させていくような視点も必要だと思う。

どちらかの方向に寄るのではなく、より多様な視点で社会の情勢に目を向けながら、変容を進めていただきたいという意見だと伺った。

外部評価でも述べたが、図書館が、適切なデバイスを用いて適切な情報へのアクセスを提供するという方向に変わっていくのは間違いないと思うし、これまでの議論や内部評価から、相模原市の図書館がその認識を持たれていることは分かった。

そのことに関連し特に触れておくと、適切な情報へのアクセスから零れ落ちてしまうことにより、義務教育以降の高等教育にアクセスできなくなる子どもたちが一定数いると思うので、そうした状況を放置し、子どもたちを取り残すようなことがないように取り組んでいただきたい。

外部評価で意見を述べた通り、日本の全図書館の蔵書数を地域住民の数で割った数は、3冊程度となっている。政令指定都市で人口規模が大きい以上、この数字が急に改善されるものではないことは承知しているが、図書館の統計指標とパフォーマンスの関係性を見るとおおよそ蔵書の絶対規模で決まっているので、相模原市の現状が2冊というのは、ある程度充実を目指さなければならないと考える。

他方で、現在の日本の図書館は、紙の本の蔵書 = コレクションという視点に極端にこだわりすぎているとも感じている。コレクションとは、紙の本以外の多様な資料も含めた概念であるので、本が全てではないという意見はその通りだと思う。その上でインターネットに対する優位性を言うならば、コレクションこそが、図書館の優位性の根拠になると考えている。一つ一つの資料はそれほど情報が無いかもしれないが、それらが一か所に集まり、手に取られ比較されることで、イ

インターネットの機械的な検索では得られないものが得られる。そこを充実させないと、図書館の未来はないのではないか。短期、中長期的には社会の変化に対応したサービスを展開しつつ、長期的には図書館の基礎体力であるコレクションの増強を計画的に継続していただきたい。

また、中央図書館機能という観点では、私が知る他の政令指定都市では、中央館が非常に大規模である一方で、分館の規模との落差が大きいように思う。多少の中央館図書館機能は必要と思うが、各地域の主要な図書館についても充実したものにし、バランスを大切にしていきたい。

テクニカルな話になるが、子どもの貸出冊数の成果指標は、『第2次計画』でも継続するのか。

『第2次計画』では成果指標にしていない。

40代の貸出利用のうち児童書が約4割という説明があったが、子どもの貸出冊数は、その年代の利用だけを見ても分からないのではないか。子どもの貸出冊数の減少幅よりも多く、大人が子どものために児童書を借りている可能性もある。

つまり、大人が児童書を借りていることがデータとして顕著なのであれば、子どもがどれだけ本を読んでいるかの指標としては、子どもの貸出冊数よりも、児童書の貸出冊数を見た方が直接的な評価ができるのではないか。

『第2次相模原市子ども読書活動推進計画』では、「児童書の貸出冊数」を成果指標として評価してきた経緯はある。

大人の関与がある以上は、その方が無難だと思う。もし「子どもの貸出冊数」とするならば、例えば就学年齢以降に区切って、自分でどれくらい借りているか、という観点で使った方が良い。

先ほどの指摘にあったように、蔵書数は図書館の基礎体力であるので、少しずつでもその増強は図っていただきたきたいし、それは紙の本だけに向かうのではなく、図書館の機能全体を充実させるための資料であったり、情報であったりといった方向にも向かうものとする。その意味で、色々な要素が絡み合っていくことと思うので、ぜひ図書館には今回の様々な意見を踏まえ、次年度以降の計画推進や活動に活かしていただきたい。

また、この評価は図書館の事業の一環として行われるものなので、本日の協議会の意見も踏まえた上で、事務局が取りまとめることになる。最終的なまとめは事務局に一任することと、必要に応じて私も関与し、協議会の意見の反映などを確認させていただくことで、了承いただきたい。

2 その他

(1) 報告

緊急事態宣言下における図書館の利用状況について

緊急事態宣言下における図書館の利用状況について、事務局より説明を行った。

【資料2】新型コロナウイルス感染症に関する対応経過等

大変な状況下で、これだけ開館しているのは良いことだと思う。一方で利用状況を伺うと、おそらく図書館のヘビーユーザーと呼ばれる、よく利用されている方はやはり図書館を利用するという結果になっており、市民の中でも、図書館を使う方と使わない方の二極分化が進んでしまったとも考えられる。社会の状況が戻った時に、図書館から離れた人たちをどう呼び戻すかというイメージや戦略を今から持っておいていただきたい。

具体的な取組として、来月から郵送サービスを行うことを計画している。料金をご負担いただくが、図書館に来館できない方にも本をお届けできるようになる。また、2月には「新型コロナウイルス感染症 ポータルサイト」として、ご自宅で過ごす方に向けて電子書籍等の外部リンク集を作成し公開した。少しずつではあるが、取組を前に進めていきたい。

(2) その他

現在、市立・相模大野・橋本の3図書館で、窓口業務等を民間事業者へ委託しているが、令和3年の9月で契約更新時期を迎えることから、10月以降の契約について、来年度に事業者の選考を予定している。

選考の詳細が決まり次第協議会にてご報告し、協議会から選考委員の推薦をお願いしたいと考えているので、ご承知置きいただきたい。

以上

相模原市立図書館協議会委員出欠席名簿

	役 職	氏 名	所 属 等	出欠席
1	会 長	小山 憲司	中央大学文学部教授	出 席
2	副 会 長	高柳 眞木子	みらい子育てネットさがみはら 連絡協議会	出 席
3	委 員	佐藤 正文	相模原市立小学校長会	欠 席
4	〃	榎本 泰行	相模原市立中学校長会	出 席
5	〃	高井 登志子	相模原市公民館連絡協議会	出 席
6	〃	金子 友枝	相模原市社会教育委員会議	出 席
7	〃	大谷 康晴	青山学院大学 コミュニティ人間科学部教授	出 席
8	〃	重光 崇	女子美術大学 図書美術館グループグループ長	出 席
9	〃	田嶋 いづみ	公募	出 席
10	〃	松橋 利光	公募	出 席